

「やりとり」は、面倒さを伴うことが前提では？

ある学生からのコミュニケーションに関連するメールに、次のような一節があった。

【 思いのキャッチボールは、やっぱり「受け止めてくれる相手がいる」からこそ相手をめがけて、自分の思いを投げることができますね。

ボールを受け止める相手によっては、こちらも投げる力やコースを加減したり、思い切って全力で投げてみたり。

よいバッテリーなら投げた後の感じを確かめてみて、お互いの一致やズレまでもやりとりしたりしますものね。

でも、こうしたやりとりの「快」の経験の積み重ねが、人への信頼、そして自分への信頼になりますよね。

阿部先生は、名キャッチャー！ですね！ 】

小さい頃から将棋、碁等も攻めの時はいいが、攻められる（守りに入る）とトンとダメで、野球で守りの要である「名キャッチャー！」と云われるのは初めてで、驚き！（@\_@）

さて、どうすれば信頼を得られるのかというような難しいことは分からないが、「受け止めてくれる相手がいる」と感じてもらうには、「お互いの一致やズレまでも」含めて、相手の発信を受け止めた（受信した）ことをなるべく間を置かずに発信し返す「やりとり」を心懸けている。

そうした「やりとり」が相手に「『快』の経験の積み重ね」となり「信頼」に繋がっているなら、有り難い、(^\_^)/

最近、コミュニケーション力が乏しい人が増えているようだが、考えてみると、現代はあらゆる面で面倒な思索・思考を必要としない便利性、効率性、簡素化を求める物質文明システム（ex.ボタン一つを押すだけで結果が手に入る）が充満しているだけに、人は無意識の内にこうした社会構造の影響を受けて育ってきており、コミュニケーションの側面にも、相手によって「投げる力やコースを加減する」というような面倒さを避け、相手に「ズレ」を感じるとそこでやりとりを直ぐに諦めるような思考停止気味に陥っているからでないだろうか。

コミュニケーション力は、やりとりを続ける過程でこそ培われ行くものと思うのだが…。